

注意事項

給水・給湯樹脂管システム「シーレックス」「シーロック¹」「プレハブ工法」及び、アルミ3層管システム「マルチ¹」を、不適切に取り扱った場合には、漏水事故等のおそれがありますので、以下の点に注意してご使用下さい。

運搬上の注意事項

①取り扱いはいねいに

トラックへの積み下しの際には、管・継手の傷つき防止及び破損防止のため、管や継手を投げたり、引きずったりしないで下さい。漏水につながるおそれがあります。

②クッション材を活用

管の傷つき、変形防止のために、トラックの荷台との接触部、ロープの固定部などにはクッション材を用いて保護するようにして下さい。

保管上の注意事項

①屋内保管で横積み

管のソリ及び変形等を防止するために、平坦な場所を選んで横積みして下さい。

②屋外保管の場合

管・継手は、直射日光に長時間さらすと変形、変色及び劣化するため、やむを得ず屋外に保管する場合は、簡単な屋根を設けるか不透明なシートをかけて十分直射日光を避けるようにして下さい。

③火気に注意

管は、可燃性材料のため火気に注意して下さい。加熱される場所（ストーブ、焼却炉の付近等）には、保管しないようにして下さい。融けるおそれがあります。

④管を開梱する際には、ナイフなどで管を傷つけないように注意して下さい。漏水につながるおそれがあります。

施工上の注意事項

施工時には、以下の①～⑪だけでなく、当社施工マニュアル『施工』の各注意事項についても十分ご注意下さい。

①取り扱いはいねいに

管・継手の傷つき防止及び破損防止のため、管や継手を放り投げたり、引きずったりしないで下さい。また、解梱の際、作業中、施工後にナイフ、釘など鋭利なもので傷をつけないで下さい。漏水につながるおそれがあります。万一傷ついた場合には、使用しないで下さい。

②適切な接合をして下さい

- ・継手接合部の直近で管を曲げるような固定は避けて下さい。このような固定が必要なときは、管・継手を直線状態で接合した後に固定を行って下さい。
- ・銅管など熱を使う配管材との接続の際は、銅管などを先に口ウ付けし冷却後、継手を接続して下さい。
- ・管挿入後に継手をねじ込まないで下さい。管に傷を付け漏水するおそれがあります。

③有機薬品に注意

管・継手は、一部の有機薬品（殺虫剤、防腐剤、白アリ駆除剤、発泡ウレタンなど）に対して材質的に侵されるおそれがありますので塗ったり、吹き付けたり、接触させたりしないで下さい。また、配管経路により土壌の汚染が予想される場所には、迂回配管等の汚染防止策をとって下さい。

④粘着テープ巻き禁止

管・継手に粘着テープを直に貼らないで下さい。材質的に侵されるおそれがあります。

⑤軟質塩ビ材料に注意

管・継手に直に軟質塩ビなど可塑剤を含んだ材料を接触させないで下さい。材質的に侵されるおそれがあります。

⑥断熱保護カバーの設置

スチーム配管等の高温(100℃以上)配管との接触又は、近接配管は避けて下さい。やむを得ず近接させる場合には、断熱保護カバーを巻くなどの処置を行って下さい。融けるおそれがあります。

⑦火花・過熱の禁止

トーチランプの火や溶接、高速カッター、サンダーなどの火花が当たったりしないよう注意して下さい。管が融けるおそれがあります。

⑧折れ曲がりに注意

管は、柔軟で曲げ配管が可能ですが、極端に曲げると折れ曲がる場合がありますので最小曲率半径を守って下さい。折れ曲がった場合には、配管をやり直して下さい。

⑨凍結のおそれがある場合、適切な防止策を施して下さい。

⑩防火区画(耐火構造の壁・床等)を貫通する場合は、所轄消防署に確認の上、建築基準法に基づいた施工または国土交通大臣認定の防火措置キットをご使用下さい。

⑪管をスチール製のラジエーターの配管にご使用の場合は、防錆処置に留意して下さい。

設計上の注意事項

樹脂管システム「シーレックス」「シーロック^フ1」「プレハブ工法」、アルミ3層管システム「マルチ^フ1」は、屋内の給水、給湯用配管システムです。耐候性部材を使用した製品以外は屋外露出配管及び配管以外の用途に使用しないで下さい。管は、日光などの紫外線によって劣化し、短期間で破損・漏水のおそれがあるので、屋外など紫外線がある場所で配管しないで下さい。

①使用温度及び最高使用圧力は下表の通りとして下さい。

・樹脂管システム「シーレックス」「シーロック^フ1」「プレハブ工法」

| | | | | | | | |
|------------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 使用温度 ℃ | 5～30 | 31～40 | 41～50 | 51～60 | 61～70 | 71～80 | 81～90 |
| 最高使用圧力 MPa | 1.0 | 0.9 | 0.8 | 0.7 | 0.6 | 0.5 | 0.4 |

・アルミ3層管システム「マルチ^フ1」

| | | |
|------------|------|-------|
| 使用温度 ℃ | 0～60 | 61～95 |
| 最高使用圧力 MPa | 1.0 | 0.8 |

②給水圧が低いと、吐水量が不足する場合があります。高置水槽方式の場合、特に上2階は注意が必要です。

注意事項

- ③給湯器は大きめの号数のものをお勧めします。号数が小さいとお湯が必要となる冬場に出湯量が不足する場合があります。
- ④水栓類の摩擦損失水頭は機種・型式により大きく異なります。メーカーにご確認下さい。
- ⑤銅合金製継手とライニング鋼管を接続する場合には、CKコアコート絶縁継手をご使用下さい。
※詳しくは「シーレックス 設計・施工マニュアル」「シーロック1^フ 設計施工マニュアル」「マルチ1^フ 設計施工マニュアル」をご参照ください。

器具接合の注意事項

- ①器具側ねじ種に注意して下さい。(破損・漏水のおそれがあります)
 - ・水栓ボックスには、Rc、Rpの2種類のタイプがあります。
 - ・適合するねじ種は下記の表の通りです。表の○印以外の組み合わせで施工しないで下さい。

| 水栓ボックス めねじタイプ | 器具側のおねじの種類 | |
|------------------|-----------------------------|---------------------------|
| | R 1/2 テーパーねじ (JIS B0203) | Pj1/2 平行ねじ (JIS B2061) |
| Rc1/2 テーパーねじ | ○ | × |
| Rp1/2 平行ねじ | × | ○ |

※外国製の水栓には、ねじ径の大きなものがありますのでご注意ください。
ねじ込みできない場合にはご相談下さい。

- ②規格外品のおねじを接合しないで下さい(破損・漏水のおそれがあります)。
 - ・接合するオネジのハマアイを測定し、規格外ねじ(細ネジ等)は接合しないで下さい。
 - ・みがき管等ネジ長さが十分なものについては、完全ねじがある分だけねじ込んで止水できるように、おねじにシールテープ等を多めに巻いて施工して下さい。
- ③シールテープの巻き方に注意して下さい(漏水のおそれがあります)。
 - ・給水栓等平行ねじの接合箇所では、シールテープを通常より多めに巻いて下さい。
 - ・シールテープは、巻き方向、むら、しわ等に注意し、張力をかけてねじ谷部にまで食い込ませて巻いて下さい。
- ④器具接合後は、混合水栓(カラン)等に絶対に乗らないで下さい(破損・けが・漏水のおそれがあります)。
 - ・器具接合後は、混合水栓(カラン)等に人が乗る等の大きな荷重・衝撃を加えないで下さい。
- ⑤凍結時には、直火等高温で解凍しないで下さい(破損・漏水のおそれがあります)。

システム毎の注意事項

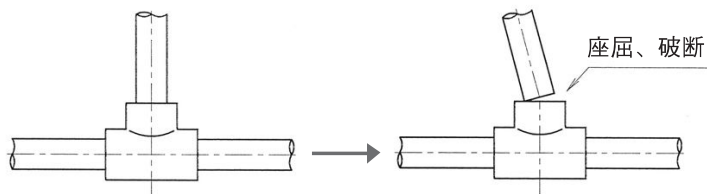
シーロック1^フ

- ・継手端部のスポンジは外さずにそのままパイプを挿入して下さい。
 - ・管は斜めに切断しないで下さい。挿入不足やパッキンの脱落につながり漏水のおそれがあります。
 - ・継手の分解・再接続は絶対におこなわないで下さい。
 - ・銅管など熱を使う配管材との接続の際は、銅管などを先に口ウ付けし冷却後、継手を接続して下さい。冷却前に接続すると継手内のパッキンが焼き付き、漏水の原因となります。
 - ・袋ナットをパイプレンチでつかみ締めないで下さい。袋ナットが破損するおそれがあります。
 - ・管挿入後に継手をねじ込まないで下さい。管に傷を付け漏水するおそれがあります。
- ※詳しくは「シーロック1^フ 設計・施工マニュアル」をご参照下さい。

プレハブ工法

敷設時の注意

樹脂継手融着部を無理に曲げたり、引っ張ったりすると、座屈したり破断するおそれがあるので、継手部を配管用固定サドルで固定してから樹脂管を引き回して敷設して下さい。



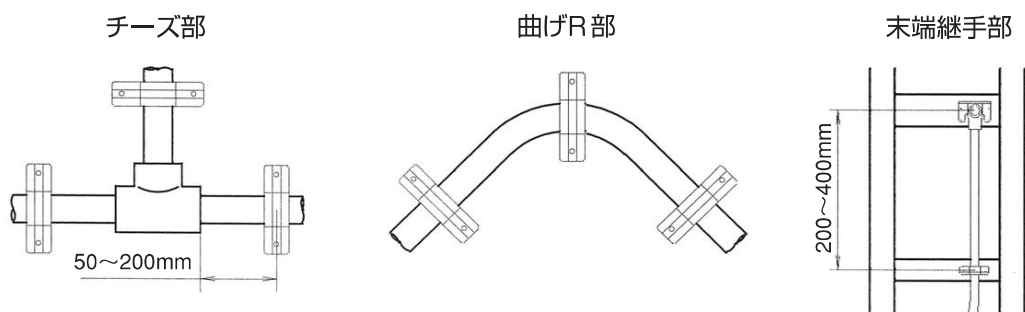
曲げ半径、折れ曲がりの注意

樹脂管は、柔軟で曲げ配管が可能ですが、最小曲げ半径（「シーロック^{ワン} 設計・施工マニュアル」記載）を守って下さい。極端に曲げると折れることがありますので注意して下さい。また、折れ曲がらなくても最小半径以下に曲げた場合には、応力により劣化、破損するおそれがあります。配管の傷付き、潰れ、折れが発生した場合には、使用しないで配管をやり直して下さい。

配管支持の注意

配管の固定は、次の事項に注意して下さい。

- ①直接、樹脂管、樹脂製継手を固定する場合には、PE、PP製の樹脂サドルをご使用下さい。可塑剤が含まれる塩ビ製サドル（塩ビコーティングサドルを含む）、ゴム付きなどのサドルは、樹脂管および樹脂製継手を侵しますので使用しないで下さい。
- ②継手部を起点に配管固定用サドルにて確実に固定してから樹脂管を引き回し敷設して下さい。配管支持箇所及び配管支持間隔は、次のように支持して下さい。



マルチ^{ワン}

・管の最小曲げ半径

| 裸管の場合 | 10A | 13A | 16A | 保温付管の場合 | 10A | 13A | 16A |
|-----------|-----|-----|-----|-----------|-----|-----|-----|
| 最小曲げR(mm) | 56 | 64 | 80 | 最小曲げR(mm) | 56 | 64 | 80 |

- ・継手端部のスポンジは外さずにそのままパイプを挿入して下さい。
- ・管を継手に挿入する際は、挿入確認スポンジが確認窓から見えるまで挿入して下さい。挿入不足では漏水のおそれがあります。
- ・接続時には管の内外面を清掃して下さい。
- ・管は斜めに切断しないで下さい。挿入不足やパッキンの脱落につながり漏水のおそれがあります。
- ・管の端部内外面を必ず専用の端面仕上器で面取りして下さい。また、切削面（面取りカス）は必ず取り除いて下さい。パッキンの傷つき、パッキンへの付着による漏水のおそれがあります。
- ・継手は、先に機器へねじ込んでから管を接続して下さい。
- ・継手を分解しないで下さい。漏水事故発生の原因となることがあります。

※詳しくは「マルチ^{ワン} 設計・施工マニュアル」をご参照下さい。